



写真-1 新川運河、右手の建物はイオンモール神戸南（平成30年3月撮影）

■ 明治4年、台風に伴う暴風雨により兵庫・神戸の港は甚大な被害が発生

兵庫港は、京都・大阪に近いという立地条件だけでなく、船の錨を下ろすのに都合の良い海底の砂と水深に恵まれた天然の良港でしたが、唯一の欠点が、南東方向からの風波を遮るものがなく船の避難場所がないことでした。平清盛が苦勞して経ヶ島を築くなどしていますが、根本的な改善には至らず、明治になって海運が盛んになると和田岬沖を通る船もさらに増え、暴風雨が吹き荒れるたびに船が転覆する事故が発生していました。

明治4（1871）年5月18日夜、関西地方を襲った台風が猛威を振るい、兵庫・神戸の港では船舶が陸に吹き上げられるなど大きな被害が発生しました。

当時の木版錦絵の瓦版（写真-2）には、「車軸を流すような雨と大風が起こっていたが、午後10時大阪天保山沖から海潮のひびき、うなりを生じ、豪然大津波となって海岸に押し寄せ、人家を一瞬にして呑み込み、碇泊の外国軍艦や蒸気船も木の葉の如くもて遊ばれる如くであった」とその惨状を記しています。

ただ当時、地震の記録はないことから、津波ではなく暴風雨に伴う波浪災害と考えられています。



神戸港の大津波

写真-2 神戸港の大津波を報じる瓦版（『ふるさとの思い出写真集』から引用）

また、写真-3 は翌日の 19 日に宇治川尻付近で撮影されたもので、右端に汽船が陸に吹き上げられているのが被害の甚大さを物語っています。

暴風雨の直撃を受けた兵庫港は、港に船の避難場所がないために 580 隻が難破し、死者 24 名、行方不明 16 名を出しました。



写真-3 宇治川尻付近における波浪災害の状況
（『ふるさとの思い出写真集』から引用）

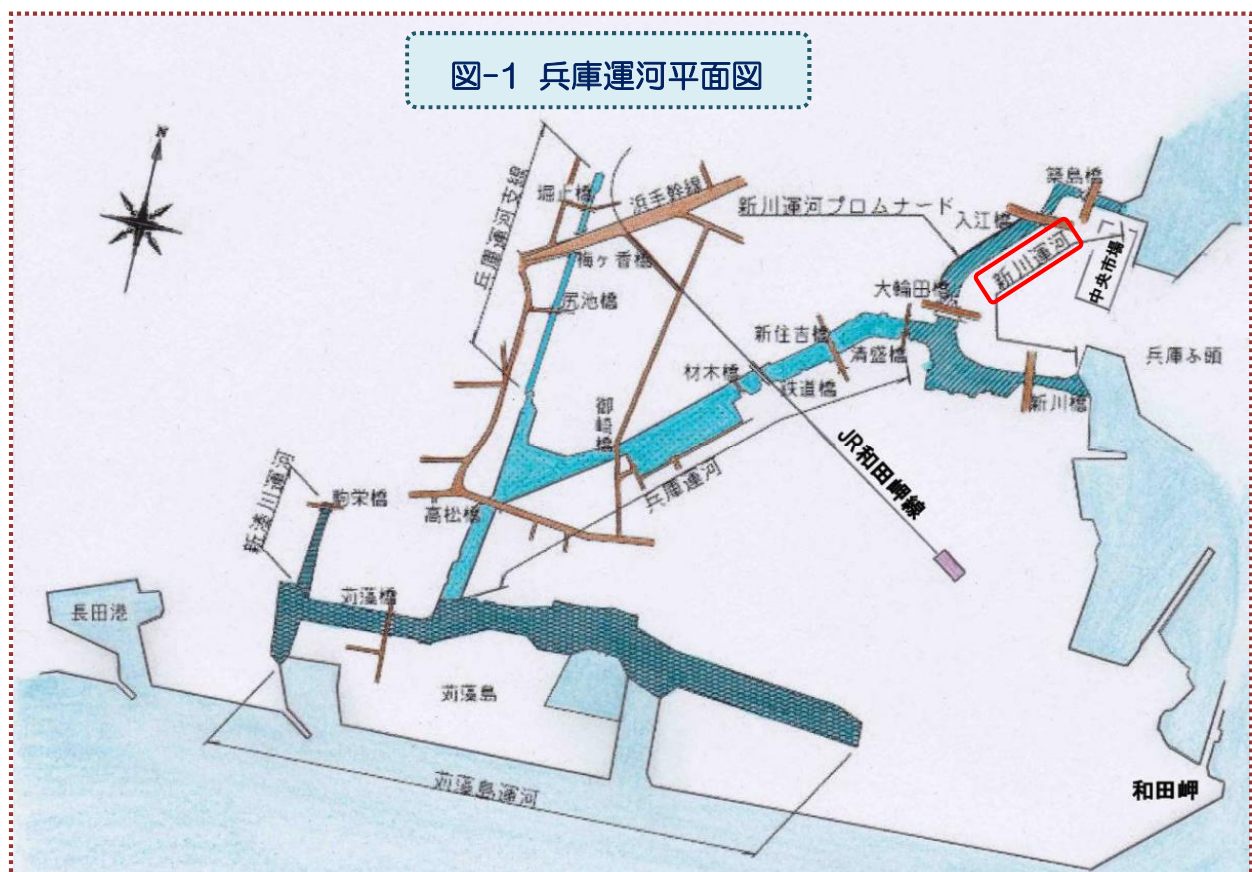
■ 神田兵右衛門、明治 4 年の波浪災害をきっかけとして兵庫運河構想を立案

慶応 3 年 12 月 7 日（1868 年 1 月 1 日）、神戸港が開港すると、開港当初から活発な取引が行われ、交易の拠点は、それまで日本有数の港町として繁栄してきた兵庫港から外国船が盛んに出入りする神戸港へと移っていきます。

当時第二区（現・兵庫区）長であった神田兵右衛門^{※1}（こうだひょうえもん）は、明治 4（1871）年の波浪災害を契機に、「運河を開削すれば天候にかかわらず港内に船舶が出入自由となり、その恩恵を受けて港は更に繁栄するであろう」と、現在の兵庫区島上町から長田区駒栄町に至る「兵庫運河建設構想」を立案、経済的に取り残されていく兵庫港の再生を図ろうとします。

この「兵庫運河」と総称される運河は、図-1 の「兵庫運河平面図」のとおり新川運河、兵庫運河（本線）、兵庫運河支線、苅藻島運河、新湊川運河によって構成されていますが、兵右衛門が考えた運河は、新川運河、兵庫運河およびその支線です。

この運河構想は、台風などの際に避難する場所を設けることで船の安全性を確保するとともに、和田岬沖を通過する際に生じる海難事故を防止し、兵庫港に安全に入港できるようにするものですが、残念ながら財源の目途がたたず、避難場所を確保するための半円形の運河（新川運河）を開削するだけにとどまります。



（神戸市 HP「兵庫運河の今昔物語」 https://www.city.kobe.lg.jp/documents/6457/ungamap_1.pdf 掲載図を加工）

※1 神田兵右衛門：天保 12（1841）年 2 月 18 日播磨国印南郡大塩村（現・姫路市大塩町）の大庄屋・梅谷庄左衛門の三男として生まれる。安政 3（1856）年、15 歳で兵庫出在家町の素封家・第 12 代神田兵右衛門の養子となる。神田家は屋号を岩間屋といい、出在家町で干鰯（ほしか）を主とした海産物、米問屋などを経営しており、兵右衛門は慶応元年に神田家の家督を継ぐ。慶応 3（1867）年 7 月、幕府は兵庫開港にあたり、日本人商人の資金力を結集し独占的に貿易にあたらせるために、大坂や兵庫などの有力商人を結集させた兵庫商社を結成、北風家に肝煎（頭取）、神田家に取締役を命じた。しかし、商社が活動開始直後に幕府は崩壊した。

明治新政府は、兵庫港および周辺の旧幕府領を管理するために兵庫県を設置。明治元年（1868）5 月から 11 ヶ月の間、兵庫県初代知事に就いたのは伊藤俊輔（博文）で、このとき伊藤は兵右衛門と同じ 27 歳であった。開港した兵庫の地に、名主たちの負担で市中警備・治安維持のため、「兵庫市兵隊」を結成したが、この市兵隊の若者たちの行儀が悪く、町民たちに迷惑をかけ、外国人との間に揉め事を起こしかねないことを憂えた兵右衛門らは教育の必要性を感じ、明治元年に伊藤知事の許可を得て神戸初の近代的学校『明親館』を開校する。

明治 4（1871）年兵庫津名主、明治 6（1873）年第二区（兵庫）区長などを歴任し、明治 12（1879）年県会議員に当選。明治 22（1889）年に神戸市制が施行されると、市会議員に選ばれ初代市会議長を務めている。この間、明治 6（1873）年には兵庫新川の開削を推進して港の便益を図ろうとしている。また、明治 11（1878）年神戸商法会議所（現・神戸商工会議所）を設立しその初代頭取となり、神戸市の商工業発展にも尽力、さらに水道布設委員長として神戸市の上水道整備にも尽力した。このような功績から兵右衛門は「神戸市を創った人」と言われ、「神戸発展の父」とも称されている。大正 10（1921）年 1 月 13 日に 81 歳で亡くなった。死去に当たり神戸市政初の市葬が行われた。



写真-4 神田兵右衛門

（和田神社「神田翁影徳碑」案内板から）

■ 新川運河の開削を先行

神田兵右衛門は、明治 7（1874）年荷揚場を兼ねた船の避難所をつくるため、新川運河計画の実現に向けて兵庫県に陳情します。この案は、江戸時代にも計画されたことがあり、県も同様の計画を持っていたことから、官民共同でこの事業に取り組むことに。

新川運河は、島上町地先の舟入江から兵庫城跡の中央部を通り、南東にカーブして今出在家町を経て海に達するもので、約 1km の区間を開削し船溜を設けます。併せて、開削時に発生した土砂を使って島上町地先の海岸部を埋立造成し、これを売却して工事費用を捻出しようとするものです。（右の図は、近世前期の兵庫津略図に新川運河のルートが無理やり書き込んだものです。）

兵右衛門らは、まず兵庫の町の税積立金から 2 万 5 千円、伊丹の小西新右衛門※2 や兵庫の北風荘右衛門※3 から 2 万 5 千円、合計 5 万円の資金提供を受けて運河開削会社「新川社」を設立します。

そして、明治 7（1874）年 2 月、神戸の商人・島田重五郎の手で開削工事に着手、兵右衛門は運河開設主任という立場で事業に参画します。



図-2 兵庫津略図

しかし、島田重五郎が倒産するなど資金的な苦境もあり、兵右衛門は私財を投げ売って工事の続行に努めますがそれでも足りず、妻の身内の御影の酒造家・嘉納治郎右衛門※4の援助を得て、明治8(1875)年5月ようやく新川運河が完成※5します。工事費は最終的に126,900円にまで膨らみました。

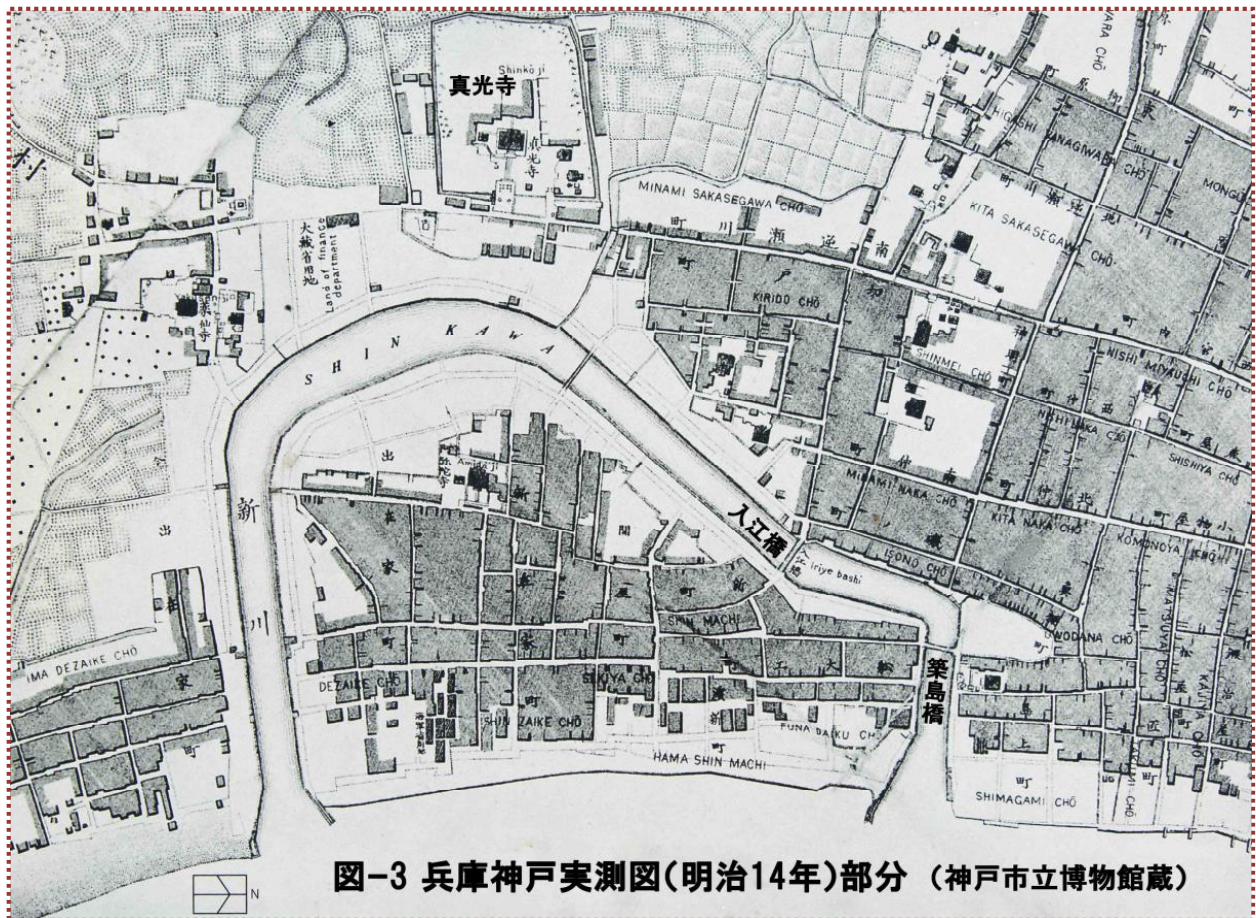


図-3 兵庫神戸実測図(明治14年)部分 (神戸市立博物館蔵)

※ 新川運河チャネルプロムナードの説明板から引用・加工

舟入江の北半分は埋め立てられ、5,278坪(甲子園球場グラウンド1.3個分)の造成地が誕生。払い下げによって得られた収入は、出資者に投資金に応じて分配されました。また、運河によって切り取られた所は中之島と呼ばれるようになりました。

※2 小西新右衛門：幕末～明治時代の酒造家。文政7(1824)年生まれ。摂津伊丹の酒醸造元小西家第10代。領主近衛家の庇護のもと町の総年寄などを務め、維新後は商法司酒造取締などの公職についた。明治12(1879)年死去。享年56。

※3 北風荘右衛門：幕末～明治時代の豪商。天保5(1834)年生まれ。兵庫の北風荘右衛門家の婿養子となり、安政2(1855)年家督を相続して荘右衛門貞忠と改名。慶応3(1867)年の兵庫開港に際しては兵庫商社肝煎に任せられ御用金を献上した。幕府の箱館産物会所用達を務める一方、西郷隆盛など多くの勤皇の志士と交わり、ひそかに援助した。明治2(1869)年会計官商法司判事となるや正造と改名。県出納掛、通商為替会社頭取などを歴任し、同6(1873)年公職を辞してから兵庫新川開削事業や米商会社、七十三国立銀行、商法会議所などの創立に尽力した。のち家業は衰退し明治18(1885)年破産した。明治28(1895)年死去。享年62。

※4 嘉納治郎右衛門：実業家。嘉納財閥・本嘉納家8代目当主で、本嘉納商店社長(菊正宗酒造)。嘉永6(1853)年摂津国御影(現・兵庫県神戸市東灘区御影町)に生まれる。明治15(1882)年家督を相続し、家業の醸造業に従事。この年商標令が公布され、従来の銘柄「本稀」を「菊正宗」と改名し登録する。醸造の改善にも取り組み、杉桶の代わりに銅タンクの使用を発明。明治40(1907)年本嘉納商店を合資会社とし、大正8(1919)年株式会社に改組。大正15(1926)年別に本嘉納合名会社を設立、土地、建物、有価証券などの投資事業も行った。また灘商業銀行(後の神戸銀行)を創立し頭取に就任、日本醸造酒会監事、武庫汽船取締役、日本相互貯蓄銀行相談役などを歴任した。また酒造業だけでなく受験進学校として知られる灘高の前身、灘中学校の創立や兵庫運河の建設工事にも力を注いだ。昭和10(1935)年死去。享年83。

※5 新川運河完成：文献により完成年が異なる。神戸市発行の文献では明治8（1875）年5月完成、神田翁彰徳碑には明治9（1876）年7月竣工とある。『神戸開港百年』（読売新聞神戸支局編）などは明治9（1876）年5月完成としている。約1kmの運河開削なので、2年くらいはかかりそう、と思うが、明治4（1871）年の生田川付け替えがわずか3ヶ月で完成していることも考慮して、ここでは明治8（1875）年完成とする。

■ 和田神社に神田兵右衛門の彰徳碑

神戸市営地下鉄海岸線の和田岬駅近くにある和田神社の境内に「神田翁彰徳碑」があります。兵右衛門の数々の功績を後世に伝えるため、兵庫南浜7町が協力して明治44（1911）年3月に建てたもので、石碑に刻まれた漢文の篆額（てんがく）は第13代兵庫県知事・服部一三によるものです。

石碑には、兵右衛門の経歴や功績などが刻まれています
が、そのうち新川運河に関する記述は下記のとおりです。

（読み下し）

港灣未だ完からず。新川社を創（はじめ、新渠をうがち九年七月川成る。翁まさくに区長たり。故に名を避け実を修め事に当り竣工す。地を得ること九千余坪、湊西区財産となし、又官に請うて、瀬海（臨海）の地一萬有余坪を得、諸街に分配し以って共有財産と為す。凡そ埠頭の地船舶の遭難する者あれば害の大小、貨の多寡に準じ費金を課賦し、俗に浦仕舞と呼ぶ。これ他人の禍難を利するなり。翁痛論して之を除く。

神田翁彰徳碑



写真-5 和田神社の神田翁彰徳碑

■ モノローグ

平成29（2017）年に文化庁が「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～」を「日本遺産」に認定していますが、平成30（2018）年5月、兵庫県の5市町（神戸市、高砂市、赤穂市、洲本市、新温泉町）を含め、14道府県の27市町が追加認定を受けました。

そのうちの一つ、神戸市の「兵庫津」は、江戸時代、瀬戸内有数の港町で北前船の寄港地として繁栄していましたが、現在は往年の活気がイマイチ感じられません。

日本遺産認定や兵庫県政150周年を契機に、兵庫の街に再び賑わいが戻ってくことを期待しています。大型SC「イオンモール神戸南」もオープンしたことだし、「ノエビアスタジアム神戸」（神戸市兵庫区御崎町）を本拠地とするヴィッセル神戸にあのイニエスタが加入することにもなったし……。



写真-6 屋形船と新川運河

影向松

和田神社の使いとして信仰される白蛇がはじめて姿を現した御神木で「影向の松」(ようごのまつ)と呼ばれ親しまれています。影向とは、神様が仮の姿で人々の前に現れることです。(「影向松」説明板より)

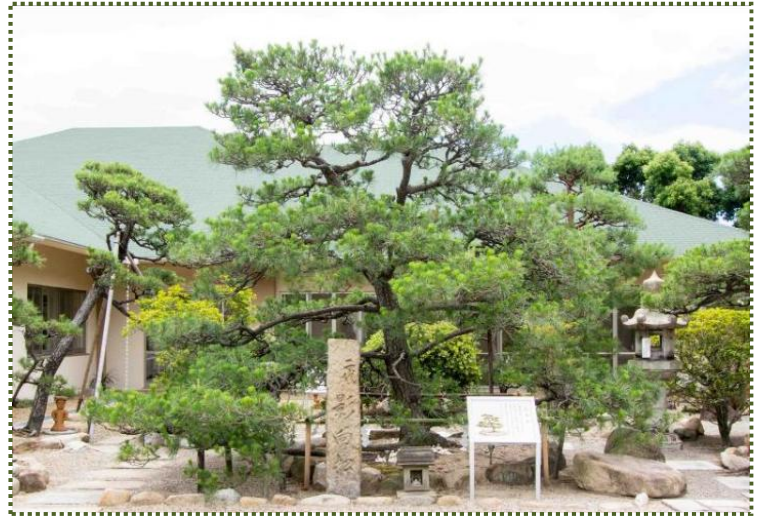


写真-7 和田神社の御神木「影向松」

【参考資料】

- 1 『新修神戸市史～歴史編Ⅲ 近世』 神戸市 平成 4 年 4 月
- 2 『新修神戸市史～行政篇Ⅲ 都市の整備』 神戸市 平成 22 年 3 月
- 3 『兵庫県の近代化遺産』 兵庫県教育委員会 平成 18 年 3 月
- 4 『近代土木遺産 兵庫運河』 神戸市兵庫区役所 平成 23 年 3 月
- 5 『神戸開港百年』 読売新聞神戸支局編 昭和 41 年 10 月
- 6 『和田岬、嘉納治郎右衛門(八代目)』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成 30 (2018) 年 8 月 『ひょうご水百景』 No.87

改訂：令和 8 (2026) 年 6 月 『ひょうご水百景』 No.87